

都市化と神社

—銀座の朝日稲荷神社の事例から—

石 井 研 士

はじめに

本論文の目的は、戦後すさまじい勢いで進んだ都市化の中で、地域社会と密接な関係を保って存在してきた神社が、どのような変化を迫られ、あるいはまたどのように対応していったか、そしてその結果、神社神道の現状はどのようなものであるかを、具体的な事例から明らかにすることにある。

都市への産業の集中とそれにとまなう都市への人口の流入は、いうまでもなく、戦後に始まった現象ではない。しかしながら、そうした現象が量的に著しくなり、時間的にも急速に進行していったのは戦後、とくに昭和30年代に始まる高度経済成長期に入ってからのことである⁽¹⁾。急激な都市への人口の流入により、大都市及び大都市周辺ではかつての人口の自然増を上回る社会増が出現することになり、社会増の主力を構成した新住民は、新しい生活様式を志向し形成していった。経済的にはオイルショック以後、低経済成長期へと移行したが、都市化は加速化することはあってもけっして減速することはなかった。

とくに東京での近年の都市化は著しく、東京への昼間の人口流入のさらなる増大、都市機能のいっそうの集中、地価の上昇と高価格での安定、ドーナツ化現象の進行、複数の大規模な再開発事業など、東京はますますその都市性を強め、情報化とあいまって一極集中が進み、東京は都市化の新しい段階へ入ったものと考えられる。また、「新人類」の出現がいわれるなど、都市化が生活構造を変化させ、さらには都市民の意識面での新たな変化が指摘されている。

かつて筆者は、中央区銀座八丁目に位置する八官神社についてモノグラフを著した⁽²⁾。銀座八官神社は、昭和57年に、神社界において初めてビルになった神社である。玉垣を取り払い樹木を撤去して30坪ほどの土地いっばいに8階建てのビルを建てた。1階と2階を打ち抜いて拝殿とし、8階に本殿を設けた。設計の段階で神社本庁と意見が衝突して離脱し、東京都の単立宗教法人となった。折衝の段階で八官神社は設計の変更を行い、地下から8階の本殿まで土の詰まったパイプを通し、神の御柱と称した。これは、元来神社は地面の上に直接建っていなければならないとする神社本庁に対する、都市化への対応として

ビル化を考えた八官神社のギリギリの回答であった。八官神社が神道界に与えた影響は少なくないように思われる⁽³⁾。

神社本庁が昭和45年に出した通達によれば、神社社殿の高層化は「神社の本姿に鑑みて遺憾」であり、「神社の本殿は、神の御住居でありその形式は「高天原に千木高知り、底津石根に宮柱太敷立て」て、大地と御本殿は直接つながって居る事を要し（例へ盛土をしてでも）、又御本殿の床下を他の目的に利用することは避けなければなりません。」とされている。要するに、社殿の上が空であること、社殿が直接地面につながっていることが神社であることの必要要件とされたのである。

しかしながら、現在見回してみても、また21世紀に向けて、新宿への都庁の移転、ウォーター・フロントの再開発、丸の内の巨大ビル郡化など、大規模な再開発事業が控える東京において、今後この通達をそのまま遵守することのできる神社がどれだけあるのだろうか。

岸本英夫は、「神社神道にとって、都市化への直面ということは、日本の仏教やキリスト教の場合とくらべて、遥かに重大な問題」⁽⁴⁾であり、神社神道の基本的な本質に係わる問題であると述べている。それは神社神道が、農耕的伝統に深く根差した日本の農村の土壌に育ち、自然との調和を重んじる日本の伝統的文化と密接に関係があるためである。神社神道が基本的にこうした性格を有するとすれば、すでに述べた急激な都市化は、岸本のいうように、重大な問題であり、神社神道の成立基盤を覆すことになる。地域の定住民としての氏子は地価の著しい高騰や住環境の劣化により郊外へと移住していく。また、巨大なマンションやアパート群が建ち、一挙に新住民が増加する。こうした流動性の高さは、結果として氏子組織の崩壊や氏子意識の希薄化をもたらすことになる。そうした結果、神社の確かな経済的基盤を得るために、八官神社とまではいかなくても、社殿や境内地の下を駐車場としたり、境内地のかなりの部分を賃貸マンションやビル用地に当てている神社も次第に見られるようになってきている。

調査対象とした朝日稲荷神社は、東京都中央区銀座3丁目に位置している。詳述は避けるが、銀座は文明開化の発祥地であり、日本の近代化や都市化を考える上での象徴的な地域である。明治2年と5年の大火を契機にして、不燃都市建築が政府によって立案され、モダンな煉瓦街が生まれることになった。四方を築地居留区、新橋ステーション、商業地としての日本橋、日比谷の官庁街に囲まれた銀座は、強制的に近代的な都市に生まれ変わらされたといえる。以後も関東大震災、第二次世界大戦による震災を経ることによって、銀座はますますその都市的様相を強めている。

本論で取り上げる朝日稲荷神社も、八官神社と同様に、ビルになった神社である。朝日稲荷神社の方が後に建築されている。朝日稲荷神社は八官神社を参考にして建築されたわけではないにもかかわらず、構造自体はきわめて似通った形態となっている。1階と2階

を打ち抜いて拝殿とし8階の屋上に本殿が鎮座している。ただし、八官神社のように、本殿は地下からパイプで繋がれていない。また、八官神社が神社本庁の傘下から離れたのに対して、朝日稲荷神社は神社本庁と被包括関係にある宗教法人である。

本論では、朝日稲荷神社の成立からビル化されるにいたった経緯を、可能な限りの資料を駆使して明らかにすることによって、社殿のビル化が神社の都市化への対応として考えられていることを示したいと思う。そして、ビル化されることによって、神社のどの部分がどのように変わったのかを考察したいと思う。

1. 朝日稲荷神社の由来

まず、朝日稲荷神社が祀られるにいたった経緯をできる限り詳細に把握し、原初的な状況を再構築したいと思う。変化を追求するためには原点を正確に把握する必要があるためである。しかしながら、八官神社とは異なり、その成立由来等は必ずしも明らかにならない。定住する神主のいない小規模な神社では、古い記録もなく、その歴史的経緯を正確に把握することはきわめて困難である。

現在朝日稲荷神社に残されている最も古い由来書は、昭和27年3月に作成された「朝日稲荷神社調書」である。朝日稲荷神社は翌昭和28年3月に宗教法人となった。この調書は法人設立のために作成されたものである。作成者は当時の銀座3丁目の町会役員である。この「朝日稲荷神社調書」によれば、朝日稲荷神社の由緒は次のようになる。短いので全文引用してみる。

由緒の詳細なる事は不明であるが古くより町内の守護神として奉斎され、遠近の崇敬を集めたり。然るに安政の大地震に当り、社殿倒壊し浮浪の徒付近に集まり見るかげもなくすたれて大正年間に至る。

此の間幾度か社殿再建の声起りたれど時未だ至らざりしも大正十二年関東の地大いに震ふ時に三十間堀の水引きて河底隆起し、先の安政の大震災に埋れたる稲荷の御霊体顕る。

町内崇敬者一同神威を畏み奉り直ちに元の社地に奉斎せんとしたれども旧社地は当時東京市有地に編入せられて東京市の管理する処となる。

当時銀座三丁目崇敬者一同時の東京市白神助役を訪ね事情を開陳して旧社地の下附方を懇請したるも事急に運び難きにより市有地の使用を黙許するとの事にて社殿を建立せり。

当時所管の築地警察館岡署長にも建築等の件にて接渉せる処、建築用地に付土地所有者たる東京市当局とそのような黙約なればやむなしとて認可せる実情なり。

かくてここに社殿を建築し崇敬せられたるも戦災の為社殿悉く烏有に帰し戦後仮社殿を建築し奉斎せり。

ここにいう安政の大地震は、安政2年（1855年）に起こった江戸最大の震災のことである。死者3,895人、倒壊家屋14,346軒という大規模な地震で、江戸の武家及び庶民の家屋の大半が壊滅したといわれる⁽⁵⁾。由緒書によれば、朝日稲荷神社は安政の大地震以前にすでに祀られていたことになる。しかしながら、江戸時代の文献を見る限り、朝日稲荷神社に言及している文献は現在までのところわかっていない⁽⁶⁾。それゆえに、明確な形で朝日稲荷神社の江戸時代の存在を確認することはできない。

それでも安政の大地震以前に朝日稲荷神社が存在していたことをうかがわせるものがある。江戸幕府は江戸城を城築するために、慶長17年（1612年）西国諸大名に命じて多くの堀割を開墾させたが、その時にできた堀割のひとつに三十間堀がある⁽⁷⁾。その後も江戸幕府は物資の搬入のために堀割の開墾を進め、「享保江戸図」によれば、銀座は周囲をすべて川で囲まれている。三十間堀には三原橋や木挽橋と並んで朝日橋という橋が掛けられている。朝日橋は明治9年に、明治5年の大火に教訓を得て鉄の橋に新たにかけ替えられている。橋の名称に関して、『東京市史稿』に次のような記載が見られる⁽⁸⁾。

朝日橋橋名伺

明治九年七月二五日出 第一課

知事 参事 土木課

橋銘伺

銀座三丁目より木挽町ニ渡ル架、今般落成ニ付、橋銘之義取調候所處、同町ニ元朝日稲荷ナル者アリ、土人朝日河岸ト相称候場所ニ付、朝日橋ト相称シ可然哉相伺候也。

つまり、かつて朝日稲荷という稲荷が存在したが、今は失われている。その名が河岸名として残されており、橋の名も稲荷の名にちなんで朝日橋⁽⁹⁾となったというのである。こうしたことから、かつてこの地に朝日稲荷が存在したことには信憑性が感じられる。

2. 出 現

由緒書によれば、関東大震災の時に三十間堀から「稲荷の御霊体」が現れたことになっている。例えば、昭和46年6月に新しく朝日稲荷神社の責任役員に着任した銀座煉瓦亭の木田孝一氏⁽¹⁰⁾は、子息の木田明利氏⁽¹¹⁾に、関東大震災の時に川をさらったお稲荷さんが出てきたと話したという⁽¹²⁾。現在朝日稲荷神社の管理をしている責任役員の沖山茂四

郎氏によれば、木田孝一氏の話しは次のようになる。

関東大震災で、銀座に住んでいた人の行方がわからなくなり、仲間が懸命に捜した。川を探そうじゃないか、ということになり三十間堀を探したところピカピカと光るものがあった。見つかったのは、お稲荷さんで祀っているせとものでできた狐であつたらしい。それを拾いあげたら行方不明の人が見つかった。見つかったのはお稲荷さんのおかげということでご信心をするようになった。ちょうど土地が15坪ばかり開いていてお社をこしらえ、木を植えてお祀りしたというのである⁽¹³⁾。

以上のように、関東大震災を契機とした朝日稲荷神社の御神体の出現は、最も古い由緒書きに見られ、また古老から言い伝えられているものの、正確な事実ではないように思える。というのは、震災前に社殿が存在したことを記憶している人がおり、さらには、三十間堀から朝日稲荷神社に関する何物かが引き上げられた話を当時直接聞いた生き証人が現存するからである。

関東大震災の時に小学校3年生であつた谷富美江さんは、震災前の神社の初午で太鼓を叩いたことがあるという⁽¹⁴⁾。谷富美江さんは大正4年生まれで、現在も朝日稲荷神社から十数メートル離れた、家はビルになった生家に住んでいる。また、谷さんの隣家に住んでいた、そして現在もその地にビルを持つ長谷川一郎氏によると、やはり震災以前からあつたのではないかという⁽¹⁵⁾。長谷川氏は昭和3年生まれで、震災当時はまだ生まれていないが、友人などからはそのように聞いたという。

震災当時銀座3丁目に住んでいた谷信夫氏は、当時の様子をかなり詳しく記憶している⁽¹⁶⁾。谷氏の話を要約すると次のようになる。

大正7年に台風があり木挽町の方から大水が押し寄せた。そのために、三十間堀の石組が崩れた。改修工事を館岡という地元の建築業者が請け負い、石垣の補修を行うことになった。このときに三十間堀からご神体を堀り出し、朝日稲荷と書いてあつたので祀つたという。

谷氏のいう銀座を襲つた大正7年の大水は、大正6年のものと思われる。『京橋区史 第二巻』中の「第十七章 変災」には、大正7年9月13日に風災のあつたことが記されているが、大規模であつたことを表すしるしはなく、大水が押し寄せるほどの大きな風災ではなかったように思われる。これに対して、大正6年10月1日の暴風雨及び津波は大正風水災史上最大の被害をもたらしたと記されている⁽¹⁷⁾。

大正6年の暴風雨と海嘯はすさまじいものであつた。三十間堀の川岸が一部壊れ、その護岸工事によって朝日稲荷のご神体が出現したとすれば、大正7年の小規模な風水害であるよりは、大正6年の大海嘯であるにちがいない。大正7年というのは、谷信夫氏の記憶違いではないかと考えられる。

このようにして、ともかくも発見されたものが朝日稲荷神社として祀られたのである⁽¹⁸⁾。祀った人物は、掘り出した館岡氏であり、自社のあった土地と朝日橋の間の空き地に祀ったと考えられる。そして、谷氏によれば、社ができたのは、掘り出してのち数年後のことであるらしい。しかも、まだその当時は町内会で祀っていたのではなく、館岡氏が私的に祀ったもののように思われるという。

謎解きめいて祀られるにいたった経緯を可能な限り詳細に追ったのは、実際と語り伝えられてきた内容の落差を明らかにするためであって、由緒の誤りを正すためではない。由緒が現在言い伝えられるような形になったのには、それなりの理由が存在するはずである。

なぜ、すでに関東大震災以前に祀られていた稲荷が、関東大震災のときに出現したとされたのだろうか。まず第一に記憶の誤り、あるいは記憶の混乱が考えられる。しかしながら、その可能性は薄いように思われるのである。というのは、「由緒書」は宗教法人設立のために昭和28年に作成されたものだからである。当時法人の設立に関わった人々は銀座に生まれ、あるいは幼少の頃から銀座で育った人物であり、彼らの年齢を考慮すると、震災前に稲荷が存在していたことを誰も知らなかったとするのはあまりに不自然である⁽¹⁹⁾。震災を契機にした出現には、作意、もしくは好意的な記憶の誤りが潜んでいる。つまり、銀座に住む人々にとって震災がきわめて大きな事件であったということ、そして、震災の与えたダメージが大きかったがゆえに、震災からの地域の復興はいっそう彼らにとって喜ばしいものであったことが、稲荷の出現に象徴的に語られているのである。

大正12年9月1日に勃発した関東大震災は、東京を壊滅状態に陥れた。関東大震災により生じた火災はすさまじい勢いで銀座をなめ尽くした。当時京橋区内の消失町数は、東京市で最高を占め、佃島・月島の一部を除いて大半を烏有に帰したという⁽²⁰⁾。

しかしながら、帝都としての東京はいち早く復興を遂げ、帝都復興の祭が昭和5年に行われている。震災による被害が大きかっただけに、復興の喜びも大きかったであろう。帝都復興祭のパレードは銀座通りで行われたが、それは当時の銀座がまさしく大東京の中心であり復興のシンボルであったからである。

朝日稲荷神社のご神体の出現がこの時期に設定されて当時の人々から語り継がれてきたとすれば、それは地元の震災からの復興を象徴しているにちがいない。国が主催したものが帝都復興の諸行事であるとすれば、朝日稲荷神社の出現は、民衆レベルでの、銀座3丁目に住む人々にとっての復興を意味していたのではないか。申請書の作成にかかわった当時の町会役員が銀座3丁目を代表する人物であったとすれば、故意にあるいは無意識に3丁目の復興、銀座全体の復興、帝都の復興と朝日稲荷神社の出現が結び付けられたことになる。人々の住む銀座3丁目という地域共同体の再生が、朝日稲荷の出現として語られていると考えられるのである。

もう一点、由緒書と現実の乖離に関して注目しておきたいのは、安政の大地震以前に祀られていたとされる稲荷と、震災後に三十間堀から現れた稲荷（あるいは稲荷のご神体らしきもの）とが同一視されている点である。実際に安政の大地震以前に当地に稲荷が祀られていたとしても、大正時代に掘り出されたものが同一であると判断される必然性はない。両者が同一であると結び付けられたのは、そう認識するメカニズムがその地に生きていたからである。こう考えると、同一であるとして結び付けられたのは、安政の大地震以前の当地と、大正時代の当地であり、江戸から明治、明治から大正へと時代が変わり、制度や政治形態が変わっても、両地における基本的な性格は変わっていないことの、あるいは変わっていないという主張の現れと考えることができる。朝日稲荷神社は、まさしく江戸時代から現在にいたるまで銀座3丁目のアイデンティティを表すシンボルとして機能していた。

3. 持続する共同体もしくは持続への意志

初午と縁日

関東大震災による火災によって、朝日稲荷神社のあった三十間堀町三丁目（当時）は焼失し、社殿も燃えてしまった。震災によって、三十間堀から朝日稲荷神社にまつわる何物かを引き上げ、安政の大地震以来埋もれていた稲荷を復興した館岡氏は銀座を去っていった。しかしながら、館岡氏は移転先へ稲荷を持っていくことをしなかった。稲荷の世話は館岡氏の移転後、銀座3丁目町会が見るようになる。

町会が世話をするようになって以来、朝日稲荷の環境は整然と整えられていく。何度か社殿の向きが変えられた後、三十間堀を背にして立つように固定された⁽²¹⁾。

昭和12年頃と思われる朝日稲荷神社の写真が2枚残されている。一枚には、谷富美江さんの息子さんと娘さんが、もう一枚には、谷さんが菓子袋を下げて写っている。残念ながら、社の正面よりはやや左を背景に写されたものである。それでも境内には藤棚が組まれ、木が繁っていることがわかる。木があるために三十間堀の向こう岸は見えない。15坪の境内地としてはきちんと整備され、厚く信仰されていることがうかがわれる。写真の右はしには、丸太のような鳥居の足が1本見えている。

写真の中で谷富美江さんが持っているのは初午に配られたお菓子である。初午はかなり賑やかに行われていたようだ。当時の様子を谷さんは次のように語っている。

お祭の時は太鼓を下へ置いておきましてね。昔はたくさん子供がいたんですよ。それで太鼓を叩くと、今日はお稲荷さんのお祭だということで集まってくるわけ。うちのおばあさんは、家にもお稲荷さんがありましたけど、天狗せんべいといって、1円買うとこんなに

あるのよ。それを奉納して子供達に一枚ずつあげた。隣所の人たちがお菓子を奉納する。こちらの稲荷が初午ならば、うちは二の午というように、交互にお祭をした。お赤飯としめを作って、子供に食べさせた。お稲荷さんというのは、子供たちに食べさせるのを喜ぶんですってね。食べさせたあと、歌ったり騒いでた。昭和10年に亡くなったおばあさんの頃はそれをやっていたの。だから昭和の初めには完全に賑やかにやっていた⁽²²⁾。

しかしながら、当時の初午には現在と違って「神主さんは来なかった。それだけの力はなかった」という⁽²³⁾。

この当時、初午とともに縁日が行われている。銀座の縁日といえば、銀座4丁目の出世地蔵尊の縁日が著名である⁽²⁴⁾。少し詳しく銀座の歴史を扱ったものであれば、必ずといっていいほど出世地蔵尊の縁日に言及している。4丁目の交差点から三原橋までの両側、そこで左右に分かれて3丁目と5丁目までの三十間堀沿いの道の両側に屋台が出た。たいそう賑やかな銀座の風物詩を構成していた。朝日稲荷の縁日は、出世地蔵尊の縁日に倣ったものである。出世地蔵尊の縁日が7日、18日、29日に行われていたために、その間の2日と12日に開かれたようだ（谷信夫氏の長女珠恵さんの話による）。珠恵さんがはっきりと縁日の日を覚えていたのは、縁日が子供にとって大変な楽しみであったためである⁽²⁵⁾。

しかしながら縁日も、戦時中の統制に合い、次第に消失していった。

戦後の宗教法人化

第二次世界対戦によって、銀座の大半は空襲を受け焼失してしまった。敗戦は確かに日本の政治や経済に大きな変化をもたらしたが、朝日稲荷神社を取り巻く環境には大きな変化はみられない。それは、空襲によって銀座が焼けても、人々は、とくに3丁目の人々はそこへ戻ったのであり、生業や生活様式、地域の人間関係に大きな変化が生じなかったからである。むしろ、戦後の制度の変化、とくに宗教に関する法的制度の変更は、朝日稲荷神社の存立維持基盤を確固とさえしたのである。昭和26年の宗教法人法の施行にともなって、朝日稲荷神社は宗教法人化されることになった。

法人設立に先立って作成された「朝日稲荷神社調書」（昭和26年3月）によれば、神社名は朝日稲荷神社、祭神は稲倉魂命、所在地は銀座三丁目五番地となっている。境内地は、「古来より鎮座せる土地にして東京市時代より無料借地として使用」と書かれている。調書に含まれている図を見ると、15坪の境内地に三十間堀を背にして0.66坪の社殿が建っている。間口4尺、奥行4尺の流造となっている。境内地には他にも鳥居が2基、石燈籠3基、手水鉢1基がある。祭礼は、2月の初午に例大祭、1月1日に元旦祭、4月29日に天長節祭、11月23日に新嘗祭を行い、毎月15日が月次祭となっている。崇敬者の中心は、銀

座三丁目居住の崇敬者約50戸であり、維持運営の責任を負うとされている。その他にも、「銀座一帯は元より木挽町、銀座方面の花柳界を初め旧京橋日本橋地区居住者の信仰厚く単に礼拝し賽物を捧ぐるのみの信者は其の数を知らず」とある。

なぜ朝日稲荷神社は法人化されたのだろうか。現在銀座には他にも町会を母体として祀られている神社があるが、宗教法人となっているのは八官神社、7丁目の豊岩稲荷、そして朝日稲荷神社の二社だけである。宗教法人法では、教義を広め、儀式行事を行い、信者を教化育成し、礼拝施設を備える宗教団体に法人格を与えることが明記されている。法人格を取得すれば、境内地や建物にかかる税の免除など、税の特別措置を受けることができる。それゆえに、宗教法人になろうとする宗教団体は、通常それなりの境内地や財産を所有していることが前提とされている。

しかしながら、朝日稲荷神社が宗教法人になろうとしたのは、上記のような税の特別措置を目的にしたものではなかった。当時の町会役員関口鹿十郎氏は、「本神社は当町会の守護神として町内の崇敬厚き神社として古くより信仰されて来たが正式の神社として公認されていないのは甚だ遺憾」とし、「今後公認神社としますます盛んにしようとするのですから・・・」と述べている⁽²⁶⁾。町内の崇敬者にとっては、朝日稲荷神社を法人化するに際して、税に関することが念頭にあったわけではなかったようだ。彼らの考えていたのは、朝日稲荷神社が公認神社となることであった。つまり、「江戸時代より存在し今に至るまで信仰を続けてきた神社なのだから」非公認であるよりも公認であることが望ましいとされたのである⁽²⁷⁾。それゆえにここでの法人化というのは、法的な次元での法人化を意味するのではなく、晴れて社会的に正式な公の神社になることを意味していたのであり、町内の守護神としての朝日稲荷神社の威厳を増すことに目的があったのである。以下説明するように、法人設立後境内地が取得されるが、境内地の購入は朝日稲荷神社を町会の守護神として、より永続性のあるものとするためであった。朝日稲荷神社の境内地の地目は変更されておらず、現在にいたるまで税金が課せられている。

こうして朝日稲荷神社は宗教法人になるための手続きを順次とることになった。宗教団体の法人取得のための手続きはかなり煩瑣である。会議によって、法人設立への意志が明確にされてから、東京都によって認証されるまでに2年近い年月が費やされている。

その間境内地の土地取得も熱心にかつ粘り強く行われた。神社の世話が館岡氏から町会へ移行した後に、当時の三丁目の崇敬者たちは、社地の下附を当時の東京市の白上助役に願い出ている。これに対して東京市は下附を認めはしなかったものの、市有地の使用を黙許することを約束し、崇敬者は社殿を建立した。銀座の警察の管轄は築地書であるが、当時の署長も東京市の黙許に従って建築を許可したという経緯が存在した。それゆえに、法人化された当時、境内地は東京都の所有となっていた。「朝日稲荷神社境内地関係記録」

(昭和32年6月)によると、東京都の財務局管財部に対して払い下げの申請が提出されたのは昭和30年2月4日のことであった。同年3月4日払い下げ譲渡の通知を受け、昭和32年6月に第1回目の払い込みを始め、昭和33年12月19日に終了している。坪単価10万5千円、15坪余で合計金額163万円余りであった。昭和31年当時の氏子数はわずかに35名であり、費用の大半は関口鹿十郎氏が支払ったという⁽²⁸⁾。

ここによりやく朝日稲荷神社は境内を所有する宗教法人となったが、昭和26年5月に法人化と境内地の取得に関する会議がもたれてから6年半後のことであったことになる。

4. 都市化の波と地域社会の変容

ガレージの建設と駐車場経営

昭和30年代の後半から、高度経済成長に歩調を合わせるかのようにというよりも、むしろ高度経済成長を体現するかのように、銀座はビルラッシュを迎えることになった。ビルのあいだぐ建築は、銀座から常住者を追い出していった。かつてそこに住んで生活していた人々が、ビルを建て、貸すことによって郊外へと移り住んでいったのである。それだけでなくも少ない氏子はいっそう少なくなり、新しく移転してきた企業の本社や支社は、町会の会員という意識も薄く、町会費すら徴収できない会員がしだいに増加していった。

そうした環境の変化を背景にして、朝日稲荷神社は昭和39年にガレージの屋上へ移されることになった。1階をガレージにして駐車場とし、屋上に朝日稲荷神社を祀ろうというものであった。

ガレージの2階に朝日稲荷神社が移されたのは、境内地が宅地として登記されており、そのために固定資産税を支払わなければならなかったからである。当時の役員が、氏子の減少と固定資産税の増加にともなって、ガレージ収入をあてようとして考え出したものである。当時の責任者たちは、神社本庁への屈出に際して、境内地を盛土し、その一部に地下を作り車庫として利用するとした。形態からして許可にならないだろうことを承知した上で既成事実を作り事後承諾の過程を踏んだのである。

しかしながら、ガレージ化によるわずかな駐車場収入ではおいおい神社を維持していくことが困難になるのは明らかであった。境内地をガレージとして2階部分に社殿を祀ったことは、後年のビル化を予告するものであった。

昭和59年のビル化

朝日稲荷神社は昭和59年にビルとなった。ビルの1階と2階の一部を拝殿とし、8階の屋上に本殿をおいた。結果的には、先に述べたように八官神社とまったく同じ形態になった。

しかしながら、朝日稲荷神社のビル化は、八官神社と異なり、朝日稲荷神社側から積極的に計画し実行されたものではない。ビル化の契機は、隣接する大広ビルの改築によってもたらされた。昭和58年に公告代理店の大広から朝日稲荷神社に対して、共同ビル建築の話が持ちかけられた。朝日稲荷神社の敷地15坪を建築敷地に加えることによって、5階建てが8階建てになるためである。

交渉は、朝日稲荷神社の代表役員および氏子、責任役員を兼務する日枝神社、東京都神社庁、そして神社本庁との間で行われ、複雑な経緯をみることになった。すでに冒頭で述べたように、ビル化に関しては八官神社の前例が存在し、八官神社の離脱は、都市部における神社のあり方に関して神道界に少なからぬ波紋を投げかけたように思われる。ここで朝日稲荷神社がビル化されることは、八官神社がけっして特殊な事例ではなく、ある意味では都市化にともなうやむをえぬ時代の推移であることを証明することになる。

朝日稲荷神社が神社本庁に提出するために作成した「主要建物改築承認申請書」（昭和58年9月19日）をもとにして、ビル化されるにいたった理由を、補足を加えながらみることにしよう。「主要建物改築承認申請書」には、改築理由として4点が挙げられている。第一点は、現状での神社の維持管理が困難であるというものである。これまで朝日稲荷神社を支えてきた町内崇敬者は、昭和30年代に始まる職住分離等によって、年々減少をたどっていった。昭和39年に建築した1階部分の駐車場の収益によってかろうじて維持運営を行っているような状態であった。しかしながら、駐車料金も5～6年先には収入よりも税の負担の方が多くなり、神社の維持が成り立たなくなることが予想された。

第二の理由は、銀座は「日本の銀座」「世界の銀座」として各ブロックごとに官民一体の地域開発が実施されており、町並みの様相は日々変わりつつあるというものである。旧態以前の古い形にこだわらず、崇敬者の気持ちを体し、道路に面したところでお参りができ、屋上のお社にも参拝ができるようになるのであれば、ビルでもよいではないかというのが崇敬者の考え方であった。都市化の先端をいく銀座の商人の先取性をうかがうことができる。

第三の理由は、銀座地区には浮浪者や不敬の徒も多く、神社の境内が昼夜の別なくそうした人々の安息場所になっており、神社の尊厳維持が困難であるというものである。そして第四点は、株式会社大広からの共同ビル建築の申し出があり、将来を展望して町内崇敬者の賛同を得たというものである。大広が朝日稲荷神社に提示した条件はきわめてよいものだった。それは、建築費用は一切要らない、8階建のビルのうち6階、7階、8階のフロアは神社の所有とするというものであった。かつて朝日稲荷神社の鎮座していた場所とはほぼ同じ部分のビルの1階と2階部分を拝殿とし、8階の屋上に本殿をおくことが可能であった。

これに対する神社本庁の基本的姿勢は、八官神社の場合と同じものであった。つまり、社殿は地面につながっていなければならない、また、社殿の上は空であることが必要であるというものであった。具体的には、本殿の下と上を貸室として利用する雑居ビルのような形態の神社は、邸内社もしくは神棚であって、「神社」とはいわないというものである。

しかしながら、神社本庁は、様々な条件を考慮した上で、経過的措置として2案を提示した。第一案は、本務社である日枝神社に合併し、境内神社として存続を図る。第二案は、朝日稲荷神社の本社（元宮）を日枝神社の境内に合併という形態で移し、銀座三丁目の稲荷神社は飛地境内地として屋上に遥拝施設を設置するというものであった。

神社本庁側の提案に対して、昭和58年の暮れに責任役員会が開かれた。工事着工をにらんでのギリギリの会議であった。会議においては第一案は朝日稲荷神社側の拒否するところとなった。そして第二案も可決されたのである。第二案の具体的内容は、本務社日枝神社境内に本殿を移し現在地に遥拝殿とする、なお、新本殿建設にいたるまで朝日稲荷神社を日枝神社境内末社山王稲荷神社本殿内に併祀する、そして拝所施設の設備研究、屋上本殿の建築について研究考慮するというものであった。両案がともに否決されたのは、朝日稲荷神社が三丁目から離れることには大きな抵抗が存在したからである。また、土地の帰属の問題も大きかったという。崇敬者が懇志を出し合って購入した境内地を簡単に日枝神社へ移譲するわけにはいかなかった⁽²⁹⁾。結局、工期に迫られて神社本庁は黙認する形になった。

昭和58年12月17日工事のため、朝日稲荷神社を日枝神社へ移す遷座祭が挙行された。そして翌昭和59年遷座祭が行われ、神社本庁の傘下の神社として初めてビル化された神社が生まれたのである。ビル化に際しては、木目細やかな配慮がなされた。拝殿の屋根にあたる2階部分は、空色に塗られ外側に向かって緩やかな傾斜がつけられている。拝殿からビルの外壁を伝ってパイプが通され、参拝者の柏手の音が屋上の本殿にとどくようになっていく。屋上も木々が植え込まれ、参道がつけられるなど、実際の地面の上に立てられているかのような錯覚さえ起こさせる。ビルの名称も「大広朝日ビル」となった。

朝日稲荷神社をビル化させた要因は、都市化にともなうさまざまなプロセスの中で生じたものであった。昭和30年代、とくに後半からのビルラッシュは、銀座を人の住まない町へと作り替えていった。そこでは、地価の上昇にともなって、八百屋、魚屋、スーパーマーケット、クリーニング店、風呂屋など、日常生活を送るための店や機関が次々と消滅していった。高い固定資産税を払うために、住民は家をビルにして階上へ住むか、あるいは郊外へ転居していった。地縁が寸断され、神社の祭礼どころではなくなっていく。現在、銀座3丁目の町会内に居住する人は、わずかに10数世帯、40名に満たない。神社はもはや崇敬者をあてにせず、自らが自らを維持するための手段を模索しなければならなく

なったのである。そしてその解決方法がビル化であったことになる。

朝日稲荷神社は、ビルとなってから賽銭が著しく増加した。これは明らかに、参拝者が増えたことを意味している。ガレージの屋上にあったよりは、境内地（と呼んでいいものかわからないが）は狭くなったものの、通りすがりにちょっとお参りするには都合がよいのだろうか。道路に面して建てられた瀟洒な拝殿は、いかにも銀座の町並みにマッチし都市に溶け込んでいるように見える。

おわりに

ビル化が都市化に対するひとつの対応であったとすれば、ビル化は銀座という特殊な地域における特殊な事例とは考えることができない。それは、空洞化の進む都心の神社であれば、どの神社でも体験するであろう出来事に端を発している。都市化が神社に対して及ぼす経緯と影響に関しては、すでに言及したので⁽³⁰⁾、ここでは、ビルになることで、神道空間の聖性がどのように変容したのかを指摘して終わりたいと思う。

まず、神道空間の変容に関して、外的要因と内的要因に分けて考える必要がある。外的要因としては、周囲の環境の劣化を挙げることができる。戦後の国や東京都による都市整備・道路計画、大資本による土地の買収と巨大ビル街の建設等は神社を取り巻く景観を大きく変化させた。周囲のビルの高層化は、神社の尊厳を大きく傷つけるものであったにちがいない。「人の住居よりは、宮柱太く千木が高くてこそ神の社としての威厳が保てたのである。これがビルの谷間に沈めば形成逆転し、人の住居は天高く聳え神の社は地にひれ伏すのである」と東京都神社庁の機関誌である「東神」（昭和37年2月2日）に記載されている。また、都市整備や道路計画によって、境内地をやむなく削られた神社もかなりの数存在する。都市化は神社を聖なる空間として存続させることを妨げる環境の劣化をもたらし、場合によってはこの聖性を奪いさえしたのである。

こうした都市化による神社を取り巻く外的環境の変化や神社空間の変容に触発されて、神社の内的変容が生じる。都市化は高い人口移動を生じさせ、神社の実際の活動と運営や経済を支える氏子組織の崩壊、氏子意識の希薄化をもたらした。こうした神社を支える基盤の変化や周囲の環境の激変は、大神社よりもむしろ中小の神社に厳しかったにちがいない。経済基盤を著しく弱めた中小の神社は、自ら維持していくための費用を捻出せざるをえず、そのためにやむなく狭い境内地を割り、聖なる空間を構成する重要な要素のひとつである「みどり」を伐採して駐車場としたり、賃貸マンションを建てるなど、自ら聖域を削除する行為を行った。大規模な神社でも、教化の名目で、結婚式場や参拝者のための駐車場の建設など、聖なる空間を俗なる空間へと転化させ自らの懐に招き入れたのである。

神社の「土地」はたんなる土地ではない。それは神道的な聖性を帯びた土地であろう。

冒頭に岸本英夫を引用して、神社神道にとって、都市化への直面が仏教やキリスト教と比較してはるかに重大な問題であることを指摘した。寺院や教会であれば、マンション形式になろうが、ビルの中途階に位置して地面についておらず上が空でなかろうが、寺院や教会の基本的性格は変わらないだろう。しかしながら、神社においては、そうした形態への移行には、神社側にも氏子崇敬者側にもまだまだ抵抗があるというのが実状ではないか。なぜ、ビルになるのがまずいのだろうか。なぜマンションの一室に祀られたら「神社」ではなくなってしまうのだろうか。それは、社殿の形態、その配置、境内地の緑、境内地の構成に、神道の本質と深く関わるものが潜んでいるあるからである⁽³¹⁾。

しかしながら、神道的な聖性空間の構造については、現在までのところほとんど明確に認識されていないように思われる。社殿や境内の構造のどの部分を変えてもかまわないのか、あるいは変えてはいけないのか、この点に関する判断基準がなく、混乱しているところに、今日神道界が都市化を初めとする産業化、近代化への対応の苦慮をうかがうことができるように思われる。

注

- (1) 加藤英俊「都市の社会学」(加藤秀俊・菊竹清訓編『都市の研究』放送大学教育振興会、昭和63年)、祖父江孝男「都市化の時代と日本人」(祖父江孝男編『日本人はどう変わったのか』日本放送出版協会、昭和62年)。
- (2) 石井研士「都市化と神社―銀座八官神社の事例から」p.28-54 『神道宗教』130号、昭和63年。
- (3) 昭和56年10月5日付の神社新報には「考えさせられた「都市化」と「神社」と題して、八官神社のケースが大きくとり上げられている。
- (4) 岸本英夫「神道の都市化」p.169、脇本平也・柳川敬一編集『岸本英夫集第五巻 戦後の宗教と社会』昭和51年、溪声社。
- (5) 「第十四章 変災」京橋区役所編『京橋区史 第一巻』昭和12年。
- (6) 以下に挙げる神社への言及の見られる江戸時代の文献には朝日稲荷神社に関する言及はない。『御府内備考続編神社部』『江戸名所記』『江戸雀』『紫のひとつと』『江戸惣鹿子名所大全』『増補江戸咄』『新編江戸砂子温故名跡志』『砂子の残月』『江戸砂子補正』『江戸名所案内』『江戸内めぐり』『江戸塵拾』『武蔵志料』『武蔵演路』『異本武江披砂』『四神地名録』『玉川披砂』『向岡閑話』『武蔵野話』『江戸近在八幡宮寄書』『江戸拾葉』『江都近郊名称一覧』『玉川辺寺社取調記』『四神社閣記』『慶長見聞集』『江戸寺社方之要鑑写』『事跡合考』『江戸住古図説』『調布日記』『願懸重宝記』『増訂一話一語』『江戸名所花暦』『東都歳時記』『江戸風俗惣まくり』『大江戸図説集覧』『江戸名所図会』『武蔵名称図会』『江府神社略記』『江戸名勝志』。
- (7) 『京橋区史 第一巻』p.36参照、京橋区役所編、昭和12年。

- (8) 東京市編『東京市市稿 第58』昭和40年, p.609-610。
- (9) 朝日橋についてまとまった紹介があるので次に引用しておく。「旭橋（あさひばし）銀座二、三丁目のさかいに旧三十間堀に架されていた橋で、朝日橋と書かれたものもある。明治二十七年当時では長十五間、幅四間四尺の木橋であったが、明治三十年代に鉄橋に改架されている。これを新撰東京名所図絵は「旭橋木挽町二、三丁目の間より、銀座三丁目と三十間堀一丁目に通ずる鉄橋にして、三十間堀に架せり。鉄柱及び欄干には、太陽と雲形の模様を露出せり、明治三十三年二月成の刻あり。」（石川梯二編『東京の橋－生きていく江戸の歴史』（新人物往来社, 昭和52年）。朝日橋は昭和二十四年に三十間堀埋め立てによって消滅した。
- (10) 木田孝一氏は、明治41年に銀座4丁目で生まれた。銀座煉瓦亭は、創業明治26年（銀座3-1, 現在の松屋南口）、初代が山本音次郎、二代が木田元次郎で、昭和7年に木田孝一氏が継承した（『中央区人物年鑑』中央区新聞社, 昭和43年）。
- (11) 木田明利氏は木田孝一氏長男。昭和9年生まれ。
- (12) 昭和62年7月9日インタビュー。
- (13) 昭和61年10月28日インタビュー。
- (14) 昭和62年9月10日インタビュー。
- (15) 昭和62年7月14日インタビュー。
- (16) 昭和62年9月10日インタビュー。
- (17) 「第十四章 変災」p.1081, 京橋区役所編『京橋区史 第一巻』昭和12年。
- (18) 谷信夫氏によれば、海溝により壊れた石組の補修工事を請け負った館岡組が、工事に際して発見したという。谷富美江さんが、かつて朝日稲荷の近所にあった樽屋の番頭さんから聞いた話によれば、三十間堀から縦に暗渠を掘ったときに現れたという。三十間堀から発見されたというものも、今ひとつはっきりしない。谷信夫氏は、「ご神体を掘り出して、朝日稲荷と書いてあったのではないかと推測し、谷富美江さんの聞いたところによれば、ちょうず鉢であったという。現在、このときに掘り出されたものは残されていない。
- (19) 設立にかかわった関口鹿十郎氏は明治33年生まれ。また、詳細は不明であるが江戸時代から銀座三丁目に店を構える松澤八衛門氏は明治20年代の生まれである。
- (20) 「第十八章 大正大震災」京橋区役所編、『京橋区史 第二巻』昭和12年。
- (21) 昭和62年7月14日, 長谷川一郎氏インタビュー。
- (22) 昭和62年7月14日インタビュー。
- (23) 昭和62年9月10日, 谷信夫氏インタビュー
- (24) 石井研士「地蔵の銀座－都市に溶け込む宗教」『言語生活』No.417。
- (25) 当時の縁日の様子を谷さんたちは次のように語っている（昭和62年9月10日インタビュー）。
- [石 井] 小さい頃縁日は楽しみでしたか。
- [一 同] 楽しみでしたよ。
- [谷 富美江] かあさんが20銭やるから牛天買ってこいって。ドーナツみたいなフワフワ。

こっちにはほうづき屋が出ていたし。せんこ花火があった。

〔谷信夫夫人〕 葡萄餅があったわよ。

〔谷 富美江〕 葡萄くらいに小さいあんこ玉。かたくりこの薄皮をつけてあって。

〔谷 信 夫〕 向こうの裏側でバイオリンを弾いていた。

〔谷 富美江〕 あそこでみんな歌聞ってくるんだものね。

〔 石 井 〕 昔の流行歌はみんなそこで覚えたわけですか。

〔谷 富美江〕 歌の本は売ったの。

〔谷信夫夫人〕 5 銭か10銭で。松屋の角でもやっていたわね。

(26) 「朝日稲荷神社設立に関する決議録」(昭和62年 5 月28日)

(27) 昭和58年 9 月に、ビル化に関して神社本庁宛に作成された「主要建物改築承認申請書」には、当時の経緯が次のように著されている。「昭和26年 4 月 3 日、宗教法人法制定交付にあたり、いちはやく、同年 5 月28日、町内崇敬者一同に会し、宗教法人法による朝日稲荷神社設立について諮った処、古くより町内崇敬者多数に崇敬されてきた神社でありながら、公認されていないのは甚だ遺憾であり、又、土地の所有権もなく借地に建っている現状に鑑み、これを機に宗教法人による神社として設立することを、全員一致の熟誠にて決議する。」

(28) 「朝日稲荷神社境内地関係記録」(昭和32年 6 月30日) および「土地所有権移転登記申請書」(昭和34年) による。

(29) 平成 2 年 2 月 5 日、三枝敏郎氏インタビュー。

(30) 石井研士「都市化と神社―銀座八官神社の事例から」p.28-54 『神道宗教』130 号、昭和63 年。

(31) 警察庁調べによれば、正月の初詣の参拝者数は、昭和55年以来明治神宮がトップとなっている。ここでは、明治神宮への参拝者数の増加が、東京という大都市における聖なる空間の問題と密接に関わっていることだけを指摘しておきたい。この点は稿を新めて述べたい。

本論の執筆が可能になったのは、三枝敏郎、沖山茂四郎両氏の協力によるところが大きい。記して謝意を表したい。

Urbanization and the *Shinto*-shrine

—A Case Study of the *Asahi Inari*-shrine of Ginza—

Kenji Ishii

By use of the example of the Asahi Inari Shrine in the Ginza district, the change and adaptation of Shinto shrines as they attempt to maintain a close connection with the local society in the midst of the tremendous post-war urbanization will be made clear. In the urbanization of the late 50's and early 60's the Asahi Inari Shrine found the foundation of its existence threatened by the appearance of office buildings in the area and the movement of the local population to the suburbs. In the midst of this situation the Asahi Inari Shrine was able to secure a stable economic foundation by itself becoming an office building, and thus remains as a symbol of the local shrines which are continuing to collapse. Since becoming an office building, visitors to the shrine have shown an increase over the previous levels, and the shrine precincts are bustling with activity. However, the shrine possesses no precinct grounds and consists instead of a hall of worship bored out of a portion of the building and an inner shrine located on the roof of the building, a form which is far removed from the traditional style of shrine. As the rate of urbanization is expected to continue at an accelerated pace, the problems posed by the Asahi Inari Shrine to the Shinto world are significant.